

上郡町の偉人

大鳥圭介

第三十四回「鵬程万里」 中川由香

天下泰平を願い実現させた、三つ子の魂

大鳥圭介生誕地保存会の大鳥圭介塾塾長・猪尾守之氏は、圭介の幼少時の上郡の状況を詳細に調査されています。猪尾塾長により圭介のエピソードの数々が判明しました。

圭介が生まれた直後、日本は大風雨、洪水に襲われ、冷害で不作続きでした。天保の大飢饉です。江戸時代四大飢饉の一つで、物価は高騰し、餓死者や行き倒れが多数生じました。五年間で百二十五万人も人口が減少します。大阪では大塩平八郎の乱が勃発しました。

上郡でも状況は深刻でした。圭介の家は、千種川を渡し舟で渡河した、岩木谷の奥、石戸にありました。猫の額ほどの土地に水田があり、軒数五十八、牛馬は六頭程度。炭焼きや紙漉きが主要な生計手段でした。谷深く日照時間が少ないため、葱も育たない土地だといわれました。その岩木谷も例外なく飢饉に見舞われます。村医者の大鳥圭介の父直輔は、稲作祈願の為、江戸の

浅草浅草寺までお参りしました。

ある時「金助さん」と呼ばれる備前の陰陽師が、岩木谷に来ます。金助さんは、毒のあるしづら（彼岸花）の根を二十日間水にさらしたり、木の皮や葛の根のあくを抜いたりし、それらを食用にする方法を人々に伝えました。彼岸花には植物性神経毒のアルカロイドが含まれますが、水溶性で長期間水にさらすことで無毒化できます。鱗茎にでんぷんを含むため、非常時に食用とされました。これにより村人は飢えから救われました。幼い慶太郎（圭介の幼名）もまた、そうして空腹を凌いだのでしよう。

慶太郎はその天下大変な世の中に、齡三つにして「天下泰平」と、氏神社である大避神社に奉納しました。幼心に、人々が安心して生きられる世の中を祈願しました。

慶太郎は村芝居、田舎歌舞伎を楽しむにしていました。高瀬舟が芝居の道具を運んでくるので、舟が来たら飛んでいくように眺め、若い衆

の頭に立って荷運びを手伝いました。慶太郎は妹お勝の世話をし、時々妹を巻いて逃げました。後にこのお勝が嫁ぐ福本家に「大持村のほていさん」という人がいました。ほていさんは慶太郎を「石戸の石摺くん」と呼びました。石摺は背が低いことを表します。慶太郎は小柄で、家の中では読書を好み祖父や父母によく仕えました。外へ出ては腕白で乱暴な一寸法師でした。年上の子供に混じり、俐巧で才智あり自然と人を統御する大将分だったと「神戸又新日報」に記載されています。

四、五mもの蛇がいました。その姿を見ただけで、恐ろしさのあまり一週間も寝込んだ人がいたとの事です。そして、狼も時折姿を見せるといわれました。そのような危険をものともせず、慶太郎は五年間、この道を通い続けました。この幼少時に身に付けた健脚と何事にも動じない胆力もまた、圭介の長じてからの特質となり、戊辰戦争を生き抜く力となりました。

慶太郎は十四歳から、谷を越えた岡山県の閑谷学校に通いました。二十数kmもの距離のある山道を毎週往復します。刀で有名な備前長船の材料になる砂鉄、千種鉄を運ぶ道でもありました。慶太郎は手足を同時に動かすならば歩きをしていたため、疲れずに長距離を歩くことができましたとのこと。閑谷学校までの途中の山道に、皆坂の滝があります。滝の近傍には大きな丸い石があり、悪い人には持ち上げられないという言い伝えがありました。慶太郎は道中、竹林を潜り、栗を拾い、野いちごを摘んでいました。また、途中の空池という場所に、長さ

天然痘が流行し、もう一人の妹のおりうは幼くして没しました。圭介は有年の蘭学医者、中島意庵に弟子入りし、医学を修めることになりました。この後も大変な天下は続きます。コレラ、麻疹が流行、一八六六年も飢饉で、徳川幕府瓦解の二因となりました。

若い衆を率いた餓鬼大将の慶太郎は、明治のテクノクラート大鳥圭介として、国の産業を率い人材を育て国力を高め、国家安定に力を注ぎました。三つ子の魂百までと言われます。三歳のときに願った天下泰平、人々が安心して暮らせる国を、圭介は自ら実現させるため、富国に献身しました。

本稿は大鳥圭介生誕地保存会様と猪尾塾長より内容のご教示ご確認をいただきました。御礼申し上げます。

まちの話題

暮らしの案内

お知らせ

イベント

イベント・スポーツニュース

鵬程万里

情報ステーション

相談窓口・新着図書・番組表

町長コラム